

水！ 水！ 水！

水 谷 年 惠 子

一掬千金

碓氷峠を上りきつた處、丁度信濃の國と上野の國との境目に、權現様のお社がある。社殿の前の石段を上ると、左右に輪型の石が据えてある。

碓氷峠のあの風車、誰を待つやらくるくくと。風が吹いても動かぬ石を、誰を待つやらくるくくと。唄にしたのは誰だらう。

社殿に近く路傍に日本武尊の、「吾妻はや。」と仰せられた跡がある。今、叢の中に建てられたさ、やかな碑が、二千年の昔を物語つてある。弟橘媛が一命を捧げられた相模の海はどの方向であらう

か、空にはたゞよふ雲、地には連なる山々の姿ばかりで、波の色は見るよしもない。

尊の御遺跡から數町谷間の方へ下ると、地の底から湧出す山の清水がある。小池を湛へて、あふれた流れが山川となり、末は野に出て、碓氷川となる。

水！ 水！ 水！

烈日の下に碓氷峠を喘ぎのぼつて、夏木立の茂みの蔭に音もせず湧く清水を掬えば、掌は玉と冷える。口中に含めば白雪と牙え、飲めば胸裡に涼風が通ふ。

碓氷峠の水！ 水！ 水！

夏毎に碓氷峠の清水を想ふ。

誰を待つ碓氷峠の風車、「吾妻はや」のみ聲の遺るあたり湧く清水！ 一掬千金！ 夏毎に汲まんとぞ思ふはあの碓氷峠の眞清水である。

露命一滴

信州の輕井澤から上州の草津温泉に至る電車に二時間ばかり揺られて、中間の驛、北輕井澤で下車すると、近年はじめられた法制大學村がある。村と言つても今の所、草木の茂みの中に、數町の此方に一軒、十數町の彼方に一棟といふ風で、至つて寂然たるものである。

渺々たる高原の一方に威容を示す淺間岳が煙を噴いてゐる。何時の昔にか、この山の降らした灰が地上の總べてを埋めたものと見えて、時に山門の石段などが發掘せられるとか言ふことである。

見渡す限り雜草と矮木が縁を延べて果しなく續

く間に、疎に建てられた村の家は、何れも避暑の別荘で、都の人が、ポツリ、ポツリと出掛けて来て夏だけ住まふ。高原の夏はよい。ほのぼのと明け行く空の彼方に、淺間の岳が香の煙を焚いて、露帯びた桔梗の蕾が力一ぱいふくらんで、ポンとはじけて大きく咲く。

草木をかきわけて、建てたばかりの別荘へ行つて住んで見た。あたりは灌木と丈の高い草ばかりの別世界である。數日の間、天の原から吹く風の涼しさと、車軸を流す夕立の快さに心身ともに洗はれて、爽やかな氣分にひたつてゐる所へ、見知らぬ人が訪ねて來た。

「お隣り——と言つても五六町向ふの者ですが、實はさぞ勉強が出来るだらうと、唯一人で來ました所、あたりには一人居らぬ寂寞が骨身に沁みて、仕事が少しも手につきませんでした。こちらにふ出でになつた方があるとわかつてから、やつ

と落附が出て嬉しくなりました。」

と言ふ。こちらも喜んで、

「秋風の立つ頃まではお隣同志、互に勵ませう」と笑ふ。何にしても人氣が乏しい。

或日、家の附近に十年の前から住みついで、不便と寒氣と寂寥とに耐えて來た一族のある事が發見された。住みかは草深いなかに、あたりの木を切つて柱とし、草の屋根を葺き、柴の戸を立て、僅に雨露を凌ぐ埴生の小屋である。それに夫婦と子供と、一家五人が住んでゐる。父親は村の普請場へ働きに出掛ける。母親は或別莊の炊事を手傳に通ふ。あとに残つた子供達は八九歳の女兒を頭に三人、一人が番傘を抱へて、原の中を一日中ぶらりぶらりとさまよひ歩く。

「こんな天氣に何だつて番傘なんか持つてゐるの。」

「雨が降つて來るんだもの。」

かう答へるのも無理がない。カラリと晴れた青空にも、油斷のならぬ淺間の山麓、あつと言ふ間に、一天俄にかき曇つて、篠つく雨のどしや降がはじまる。ソラと言つて駈けこむ軒も無ければ、雨やどりする大樹の蔭もない。此の時此の際、高原の子等は抱へ持つたる番傘をさつと開いて、三人が一傘の下に集つて、雨の過ぎるのを待つのである。

桔梗・刈萱・女郎花、色鮮やかに咲く大高原の眞只中で、一ひらの傘をたよりの子供等が、盆を覆へす夕立に打たれて居る態を思ふと、可愛らしくもあり、可哀想でもある。

二本棒を垂らして、赤髪をざんと下げ、いとも無表情な顔附をして外來の都人を見やる姉娘に、
「どうして學校へ行かないの。」

と聞くと、

「靴がねえだもの。」

と言ふ。

「どうして髪をいはないの。」

と聞くと、

「櫛がねえだもの。」

と答へる。どうして毎日外を歩いてゐるのと聞くと、

「うちへ這入れねえだもの。」

と言ふ。

母親に聞いて見ると、両親の留守中に、子供達が悪戯して、マツチをすつて、ボウーと草家を燃してしまつた。それ以來、留守中は錠をゆるして置くのだと言ふ。

草深い此の曠野に、妻を携へた若者が、飄然として來て、住みつくに至つた動機は何であらう。外でもない、叢の中に湧く一すぢの清水である。草の根を濡して、細々と湧く清水！ この清水こそ、さすらひの若き夫婦を、人家のない此の高原

に土着せしめる源であつた。若者はこの清水の傍に、己の手で夫婦の寝るべき小家を作つたのである。

一すぢの清水！ これが此の一家五人の生命であつた。湧いて出る細い清水を、地の窪みに溜めて、これを飲んで、夫婦は三人の子供を得た。この清水が涸れない限りは、此の一家は此の小家に繁榮するであらう。

